

2018年度 帰国隊員/青年支援プロジェクト 実施報告書		提出日 2019年 5月 4日
氏名：朝倉 祐子	実施国：エチオピア	調査研究
活動名称	開発途上国における乳幼児期の教育とケア	
実施期間	2018年10月8日～2018年10月16日	
(1) 申請した動機		
<p>エチオピアでの協力隊活動で抱いた疑問や課題を明らかにすべく、大学院で国際協力における乳幼児期の教育とケア（ECD：Early Child Development）について研究を始めた。国際協力における人間開発の分野では、乳幼児期の教育やケアが成長過程の中で非常に重要となり子どもたちのその後の人生に大きく影響すると考えられている。日本からのECDにおける研究や大きなプロジェクトの実施は数少なく、課題は多く存在する。その中で自身の研究では、エチオピアの教育やケアに直接関わる教員を対象にした研究・調査を行い、今後のECDにおける支援の課題を明らかにすることとした。研究を行うにあたって、現地での調査を行うことにより、実際に調査対象者の顔を見て調査の内容を説明しながらアンケート等を行う事ができる利点があり、更に、調査の対象としてコンタクトの取りづらい対象者にもアンケート等を行う事ができるため、現地調査の必要性は高いと考えた事が。本プロジェクトを申請した動機である。</p>		
(2) 活動内容概要		
<p>現地では主にアンケートの実施を目的として調査活動を行なった。調査地は首都アディスアベバで、政府管轄の幼稚園で働く教員を調査対象とした。調査活動では、これまで協力隊が支援に関わった幼稚園を訪問し、協力隊の支援を受けた事がある受益者側としての意見を聞いた。一方で、今回は現在エチオピアで活動している教育系の隊員にも協力してもらい、これまで一度も協力隊との関わりがない幼稚園にも訪問し、その教員等からは非受益者としての意見を聞く事ができた。合計122人からアンケートを回収し、調査中には教員から現地の教育制度や教育環境の状況を聞き取り、論文執筆にあたって教育現場の実情を明らかにする要素を収集した。</p> <p>現地での調査活動後は、アンケートの集計、統計ソフトSPSSでのデータ分析を行い、本研究の目的である、保育・教育方法が異なるエチオピアの就学前教育現場の開発という文脈から、隊員の支援が現地の幼稚園教諭にどのような保育概念与えているのかを明らかにすることと、支援によって受け取った知識や経験を実践力として保育現場で活用しているかどうかについてを明らかにする論文を執筆した。</p>		
(3) 活動の成果・苦労した点・反省点等		
<p>活動の成果として、これまでエチオピアの幼児教育における協力隊の活動が現地の教員にどのようなインパクトを与え、またそれが今後のECDの発展にどのように関連させて行くべきなのかが、アンケートの分析結果により明らかにする事ができた。この結果により、日本のECD支援における支援のあり方や教育の質向上に向けた新たな課題を見出す一考が導き出され、これまで日本のECD支援を担っていた協力隊の活動の限界や課題、また今後の支援の重要性についても論文に記載できるエビデンスとなった。</p> <p>苦労した点は、現地調査において対象者のスケジュールを確保する事であった。日本からは現在活動中の隊員にコンタクトをとり協力して頂いたが、対象として選んだ学校が休みであったり、責任者がおらずアンケート実施の許可が得られなかったりした事があった。また、限られた時間の中でできるだけ多くのデータを収集しておきたかったため、対象者に対してアンケートの説明も深く行うことができず、本調査の意図をしっかりと理解してもらった上で調査を行えば、もう少しアンケートの欠損等も少なく抑えられたかと思う点は反省点である。</p>		
(4) 今後のプラン		
<p>本研究で行なった調査では貴重なデータが得られ、新たな研究課題を見つける事ができた。時期をみて博士号課程に進学し、引き続き研究を続けて国際協力に貢献していきたい。</p>		